歳時記のある暮らし

二〇二〇年《十一月》

木々の葉が冷たさに揉み出され色づくころとなりました。

皆様、おすこやかにお過ごしでしょうか。

いつも『神秘の健康力』をご愛用いただき誠にありがとうございます。

十一月、初旬は快適な秋晴れが続きますが、立冬を過ぎると肌寒さを感じはじめます。

山茶花の垣一重なり法華寺　　夏目　漱石

落ち葉林火きでおなじみの童謡に登場する山茶花の花。山茶花は道沿いの垣根に咲いてあたりを明るくする初冬の風物詩です。中旬には霜が降りる地方もあり、山野や街路樹の木々の葉が黄色や赤の色どりを濃くしていきます。下旬は冬型の気圧配置となって寒気が南下し木枯し一号の便りも届き、冬の到来が近いことを感じます。十一月は一年のうちで最も気温に変化があり、皮膚感覚で季節の移ろいを感じやすい月です。

色あせたススキが夕日を浴びて、金色に輝きながら優雅に、風に揺らぐように、自然はものの色を変え形を変えて人々の心に郷愁を誘います。一抹の寂しさを覚える晩秋は人々に寒くて長い冬を凌ぐ気持ちを駆り立て、詩や俳句などでも数々の名作を生んできました。

「春はあけぼの」で始まる「枕草子」で清少納言は秋をこのように述べました。「秋は夕暮れ。夕日の差して、山の端いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど、飛び急ぐさへ、あはれなり。まして、雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。」

外灯や車のライトも家々の明かりもない昔は、真っ赤に染まる夕焼け空と暗い山や田の対比が美しかったことでしょう。暮れ行く空に鳥たちが家路を急ぐ姿を追っているうちに、空は黒幕を一気に垂らしたように真っ暗になります。秋、日が暮れると趣は目に見えるものから耳で聞こえるものに変わります。暗闇に包まれて風の音や虫の声を聞くことも風流です。

本来なら、紅葉狩り、温泉旅行、柿狩り、行事やお祭りと楽しみが多い十一月ですが、今年、新型コロナウイルスの影響で中止や規模の縮小が相次ぎます。今年はコロナ禍によって文明社会でも

（裏へ続きます）

手ごわい敵がいることを知りました。会食も、行楽も、お祭りも存分に楽しめない年になりました。命が脅かされ、楽しい時間が奪われ、偏見や差別を助長し、マスクや消毒が必然の暮らしとなりました。「新しい日常」といわれてもどこか納得できないところがあり、心は重く沈みがちになります。けれども、不満を感じながら、この素敵な季節を無駄に過ごすことはもったいないことです。

涼しくて頭も冴える晩秋は、温かいものでも飲みながらのんびりと読書をしたり、趣味に打ち込むことも楽しいものです。今の状況で自分が楽しめることを見つけたいものです。

美しく色づくモミジやツタ、カエデやイチョウなどの木々の葉は見事に変色して晩秋の景色を照らします。紅葉する秋の山を「山粧う(やまよそおう)」といいますが、赤や黄色、橙に色づいた木々の葉は、朽ち果てる前にカラフルな折り紙のような姿に変え、その身をはらはらと風に乗せ、綿の反物を広げたような風景をつくります。美しい秋の一コマを記憶に残しておきましょう。

素朴な琴

この明るさのなかへ
ひとつの素朴な琴をおけば
秋の美しさに耐えかねて
琴はしづかに鳴りいでずだらう

若くして病没した八木重吉の詩です。たった四行で秋の景色の見事さを表現しています。高村光太郎は八木重吉詩集の序文のなかで「詩人八木重吉の詩は不朽である。このきよい、心のしたたりのやうな詩はいかなる世代の中にあっても死なない。これらのやさしい詩をよんで却って湧き出づる力を与へられ、これらの淡々たる言葉から無限のあたたかさに光被せられる思いをする。」と述べています。

クリスマス、年賀状、カレンダーなどの商戦が始まり一気に年末に向けて時間が進みます。忙しさとともに木枯らしが吹いて急に寒くなる日が来ます。本格的な冬を控え身体を寒さに慣らしておきましょう。インフルエンザの予防接種も混まないうちに予約しておきましょう。

皆様のご健康をお祈り申しあげます。

金氏高麗人参株式会社

おもてなし係 お手紙担当 久郷 直子